

□書 評□

阿 部 正 和・青木ミツエ 編 集

胃腸疾患患者の看護 病態生理から生活指導まで
＜疾患別看護双書 9＞

東京医大教授 芦 沢 真 六

看護婦，看護学生を主たる対象として書かれた本は今迄少なく，ときに胃腸疾患についての講義を依頼される時など 2, 3 の書を見ても，内容が簡単すぎたり，またあまりに古すぎたりということで，これはと推せんできそうなものが出版されないものかとかねてから考えていた。

たまたま本書を開いてみると，巻頭の別図にわが国でつくられ，わが国で発達し，いま世界にも広がりつつある胃カメラの美麗なカラー写真が適確なシェーマと共に取り入れられついで第1の解剖，生理の項にはガストリン，第2の病態生理の項では胃全摘後の病態生理とそれに対する対策，そして第3の診断に必要な検査と看護婦の役割の項では，新しい胃液検査としてのヒストローグ法，エックス線検査での病変が描写される理屈や，また生検，細胞診に

ついても，わかりやすくその意義や方法などが説明されており，これらの新しいことをも取り入れた前半を通読することにより，たくさんある胃腸疾患の検査がいかなる理由で，どういうことを目的として行なわれるものであるかが理解されよう。検査に際してただ誰かに言われるままに理由も知らずに機械的に行なうのと，なぜということを知って行なうのとではたいへんな違いであり，そこに今後の進歩も期待されることになる。

第4項目から第8項目まではいろいろの胃腸症状の発現機序，内科的および外科的の各種疾患の解説に加えて，そのそれぞれの場合に対する治療と看護の実際が，あたかも著者ら自身が患者であるごとく，患者にはこうしてあげるのがよいのだということをも“ふん囲気のコントロール”

“手術前の細かい注意”まで取りあげて書かれている。

そして胃腸疾患では特にたいせつな食事療法については別に項をもうけ，最近の考え方が書かれており，特にたいせつな疾患については食事表，献立例もつけられている。

まことに至れり尽くせりの胃腸疾患についての病態生理から看護までの書というべきであり，むしろ幅が広すぎるというべきかもしれない。しかし本書を利用する人によって，吸収すべきポイントはおのずから異なることを考えれば，幅は広いほどよい。どこがポイントかを選ぶのは読者であり，ポイントはすべて含まれているといつてよい。消化器病患者に接する看護婦には好適の参考書であろう。

A5判 頁130 図130 原色図4

¥ 1,300 円 110

医学書院 刊